

- 1) Bourguignon: Deutsch. Zeitschr. f. Nervenheilk., 129, (1933). 2) Stein: Deutsch. Zeitschr. f. Nervenheilk., 100, (1927). 3) 高橋: 日本傳染病學會雜誌. 第9卷. 1256頁. (昭和十年). 4) Schottmüller: L. Mohr u. R. Staehelin Handbuch der inneren Medizin B. 1. Infektionskrankheiten 469頁. (1911). 5) Bergmann: Lehrbuch der inneren Medizin (1931). 6) G. Jochmann: Infektionskrankheiten (1924). 7) Curschmann-Hirsch: Der Unterleibstypus 2. auflage (1913). 8) 村山達三: 日本内科全書. 八卷. 9) 松尾, 池邊, 雨森, 都留: 長崎醫學會雜誌. 第10卷. 414頁. (昭七). 10) Stein u. Quincke: Zentralbl. f. gesamt Neurol. u. Psychiat. 60, (1931). 以上.

劇性猩紅熱血液像所見補遺

(第五回東京市立傳染病院集談會所演)

東京市立荏原病院 杉 山 龍 二

目次

- 第一章 緒言
第二章 實驗例

第一章 緒言

從來日本内地ニ於ケル猩紅熱ハ一般ニ輕症ナルモノ多ク、從テ其ノ死亡率モ低キヲ常トス。最近特ニ朝鮮滿洲地方トノ交通頻繁トナルニ伴ヒ内地ニ於テモ次第ニ重症ノモノヲ散見スルニ至レリ。抑々猩紅熱ノ死亡ハ其ノ原因トシテ、劇性猩紅熱、急性心臟衰弱、或ハ敗血症、尿毒症等ノ併發ヲ擧ゲラル。此ノ中最モ劇烈ナル症狀ト共ニ迅速ニ死亡スルモノハ、所謂劇性猩紅熱ニシテ、一般ニ極メテ著シキ白血球增多症ヲ見ル。本邦ニ於テ最近吉田博士⁽⁴⁾ハ猩紅熱ノ種々ナル場合ニ於ケル血液像ニ付テ詳ニ報告サレタルガ、特ニ重症死亡セル猩紅熱ノ場合ニハ重症ナル程著シキ白血球增多症アル事ヲ報ゼリ。又佐々木⁽⁵⁾、小島⁽⁶⁾兩氏モ其ノ重篤例ニ於テ顯著ナル白血球增多症ヲ見タリ。其

杉山ニ劇性猩紅熱血液像所見補遺

68. 他重篤ナル例ニ於テハ淋巴球及ビ「エオジン」嗜好細胞ノ減少等ノ所見モ報ゼラル。余ハ最近住原病院ニ於テ正ニ劇性猩紅熱ニ屬セシム可キ急死セル二例ヲ經驗セリ。而シテ此ノ經過ニ從ヒ血液像其他ニツキテ詳細ニ追求スル事ヲ得タリ。特ニ其内一例ニ就テハ日ヲ追ヒテ毎日採血シ其ノ血液像ノ推移變化ヲ窺ヒテ聊カ興味アル結果ヲ得タリ。而シテ兩例共反覆採血培養血液試驗ヲ試ミタルモ常時陰性ニ終レリ。即チ此ノ二例ハ敗血症ニ非ザル、所謂劇性ノ經過ヲ取リテ死ノ轉歸ヲトレル猩紅熱症例ト信ジ特ニ其ノ血液像ニ關聯シテ報告セント欲ス。

第二章 實驗例

余ハ先ヅ上記二例ニ就キ簡單ニ臨牀所見ヲ述べ、後血液像ニ就テ記載セントス。

第一例 女、五歲。

家族歴及ビ既往症。殊記ス可キ事無シ。

發病。昭和九年十二月十一日突如惡心、嘔吐アリ、翌十二日惡寒ト共ニ四十度三分ノ高熱ヲ發ス。強キ咽頭痛ヲ訴ヘ同時ニ痙攣ヲトモナヒ全身ニ發赤ス、即時、猩紅熱ノ診斷ノ下ニ送院サル。

入院時所見。患者ハ意識不明、仲バ昏睡狀態ニシテ時々痙攣有リ、體格大榮養可良、皮下脂肪層ノ發育モ甚ダ良ナリ。顔貌充血潮紅シテ全身ニ強度ノ發疹ヲ認ム。其ノ赤色ハ稍々暗紫色ヲ帶ビ一見不快ノ感ヲ起サシメ又口圍蒼白甚ダ著明ナリ、強度ノ「アンギーナ」ト定型的覆盆子舌、強キ咽頭痛アリ。謔語ヲ認ム、又失禁アリ、左右頸部淋巴腺二三腫脹スルモ壓痛ナシ、體溫四十度三分、呼吸三十、脈搏百四十。

咽頭塗抹培養中ニ溶血性連鎖球菌ヲ認メ、又餘リノ劇症ノ爲敗血症ヲ疑ヒ採血シ血液寒天培養ヲ試ミシモ陰性ナリキ。尿ハ「ウロビリゲン」、「ウロビリノゲン」共ニ強陽性、蛋白ハ弱陽性、ルンベル・レーテ竝ニシユルツ、

シヤールトン氏現象共ニ陽性ナリ。胸部諸臟器中心臟ニ於テ、心音ノ強調

及ビ頻數ニシテ心尖ニ收縮期不純音ヲ聽取セル外別ニ異狀無ク、腹部ハ稍膨隆シ居レド抵抗無ク肝脾共ニ觸知セズ。

經過。其後意識ナホ不明瞭、發赤極メテ強ク又「ミリアリア」ノ發生ヲ認メ、食思全ク無シ。第四病日頃意識稍々明瞭トナル、咽頭痛尙ホ強ク、嘔下困難ニ陥入ル。「アンギーナ」極メテ強ク即チ咽頭ハ極度ニ發赤シ膿粘液ヲ以テ覆ハル、其ノ粘稠度ノ餘リニモ強キ爲患者自身咯出不可能ニシテ附添人ノ綿棒ニテ水飴ノ如ク之ヲ卷キ取ルヲ見受ケタリ、此事ハ次ノ第二症例ニ於テモ亦同様ニ認メラレタリ。

落屑ハ五、六日頃ヨリ開始セルガ、之又極メテ厚ク所々ニ水泡ヲ形成セリ、其跡ニ潰瘍ヲ形成シ疼痛ヲ訴ヘタリ。

其後體溫相變ラズ三十九度ヲ前後シ、一時稍々明瞭トナリシ意識モ亦不明ニ近ク、食慾モ全ク無ク、總テノ治療ノ效ナク發病十日遂ニ鬼籍ニ入ル。死ノ直前及ビ數回ニ互リ採血培養セルガ、血液寒天上何等ノ集落ヲ認メズ

液寒天培養全ク陰性ナリキ(第二表參照)。

上記諸症狀ヨリ見ルニ本二例ハ敗血症ニ非ザル可ク、全ク急激ナル經過ヲ取りテ遂ニ死亡セル劇性猩紅熱ナリト信ズ。

治療トシテ兩者共五%、二十五%ノ葡萄糖液注射、リンゲル氏液、強心劑ノ注射、猩紅熱恢復期患者血清注射、及ビ輸血等ヲ用ヒ其他症狀ニ從ツテ處置セリ。

血液所見ニ付テ。

次ニ第一例(五歳ノ方)ノ毎日採血シテ研究セルモノ及ビ第二例(十五歳ノ方)ノ數度ニ互リテ採血セル血液像其他ニ付キ報告セン。

上記ノ如キ劇性猩紅熱ノ血液像ニ付キ述ブルニ當リ、之ヲ比較的輕症ニテ經過セシ猩紅熱ノ血液像ト比較對象シテ研究スルハ甚ダ興味アル事ト信ジ余ハ比較的輕症ナル十數例ノ血液像ヲ熱型ト共ニ研究シ、第三表ニ其ノ標準成績ヲ示セリ。

該成績ハ吉田博士ノカツテ本誌上ニ報ゼルモノトヤ、一致ス。

同様ノ表ヲ本劇症第一例ニツキ製作セバ第四表ノ如シ。

次ニ第一例ノ血球數及ビ血球ノ形態學的ノ詳細ハ第五表ニ示ス如シ。

次ニ劇症第二例ヲ同様ノ目的ニテ表示スレバ第六表ヲ得、而シテ上記二例ハ前述セル如ク臨牀所見ニ於テ類似セルノミナラズ、又其ノ血液像ニ於テモ極メテ類似スル點多キヲ認ム可シ。

以上ノ諸表ヨリ比較考察スルニ輕症ナル場合ハ、初發體溫多クハ三十九度前後ニシテ第四又ハ第五病日頃ヨリ下降ス。然ルニ余ノ得タル劇症例ニ於テ第三、第四病日四十度ヲ越シ其後三十八乃至三十九度ノ間ヲ上下シ解熱ノ傾向ヲ示サズ。

次ニ血液像其他ニ付キ見ルニ、由來猩紅熱ハ白血球增多症ヲ以テ特徴トスル疾患ナレドモ輕症例ニ於テハ第三表ニ

ロセント」ニ復歸ス。

杉山ニ劇性猩紅熱血液像所見補遺

輕症ナル場合ニ中性嗜好白血球ノ出現率ハ第三、第四病日ニ最モ多ク、總白血球數增多ノ減少ト共ニ漸次正常ノ「ブ

(一) 中性嗜好白血球

次ニ白血球ノ各種類ニ付キ詳述セン。

又第二例ニ於テモ第三病日一五〇〇〇、死亡日ニ於テ六四〇〇〇ノ多キヲ算スル。

十病日ニ於テ七八〇〇〇ノ驚ク可キ白血球增多症ヲ示セリ。

ス。然ルニ第一例ニ於テハ第五表ニ見ル如ク第二病日ニ於テ既ニ一六〇〇〇ヲ算シ其後毎日増加シ表ニ見ル如ク第

リ正常ニ復

第九病日ニ至

少シテ第八、

球增多症モ減

熱ト共ニ白血

ズ、而シテ下

〇〇〇ヲ越エ

〇〇乃至二〇

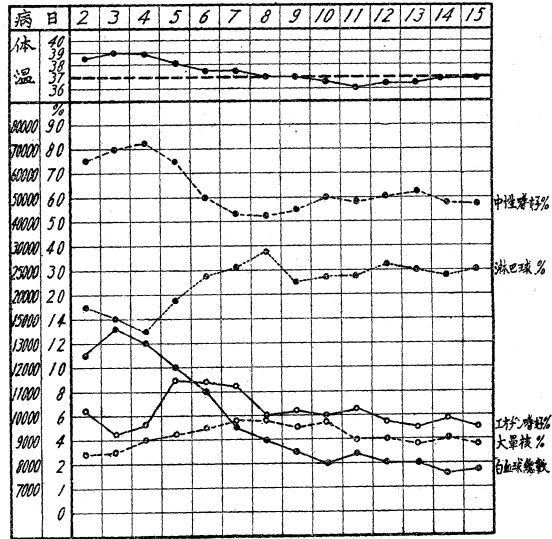
シカモ一五〇

病日最モ多ク

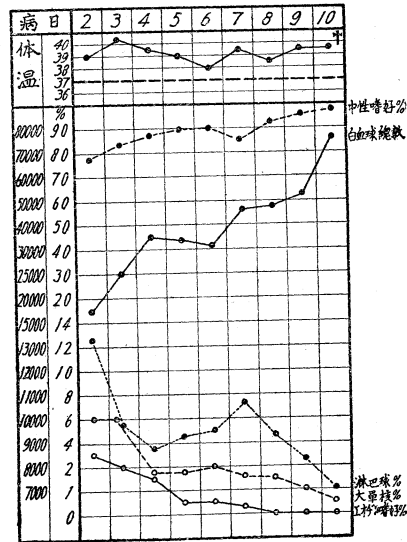
クハ第三、四

見ル如ク多

第三表



第四表 五歳ノ少女



第五表 五歳ノ少女

病日	赤血球		白血球													
	總數	血色素量 (グーリー)	總數	淋巴球		中性嗜好					嗜好 「エオジン」嗜	鹽基性嗜好	「ステン」	行大單核及移型 「ミエロブラ	刺戟性	
				「アツール」 顆粒アル者 「リンボチイ	「アツール」 顆粒アル者	分核	桿狀核	ロチイテン	「メタミエ	「ミエロチイ						胞アル者
二日	四五〇萬	七五%	一、六〇〇〇	一二・五	二・五	四六・〇	二五・五	五・〇	二・〇	三・〇	五・〇	三・〇	〇	〇	六・〇	〇
三日	四八〇萬	七三%	二、五〇〇〇	五・五	〇・八	二九・〇	三九・〇	一三・〇	二・〇	五・〇	八・〇	二・〇	〇	二・五	六・〇	一・〇
四日	四六五萬	七五%	三、六〇〇〇	三・五	〇・五	三六・〇	三八・七	九・〇	四・〇	八・〇	一八・〇	一・五	〇	三・五	一・八	二・〇
五日	四五五萬	七七%	三、五〇〇〇	四・五	〇	三一・七	四〇・〇	一三・五	五・〇	九・〇	二〇・〇	〇・五	〇	二・〇	一・八	一・〇
六日	四六〇萬	八〇%	三、二〇〇〇	五・〇	〇	三九・二	三七・〇	八・〇	五・五	九・〇	一三・〇	〇・五	〇	三・〇	二・〇	〇
七日	四八〇萬	七九%	四、八〇〇〇	七・六	〇・八	四六・〇	三〇・〇	五・〇	五・四	一〇・〇	一六・〇	〇・四	〇	二・五	一・六	一・五
八日	四六〇萬	七五%	四、九〇〇〇	四・五	〇	五六・五	二二・〇	八・五	五・〇	一五・〇	一八・〇	〇	〇	二・〇	一・五	〇
九日	四五五萬	七二%	五、二〇〇〇	二・五	〇	五四・〇	二九・〇	五・五	五・五	一五・〇	一四・〇	〇	〇	〇・五	一・〇	二・〇
十日	四七五萬	八〇%	七、八〇〇〇	一・〇	〇	四九・〇	三五・〇	八・〇	五・〇	一〇・〇	一〇・〇	〇	〇	一・五	〇・五	〇

杉山ニ劇性猩紅熱血液像所見補遺

然ルニ劇症例ニ於テハ總白血球數ト共ニ増大シ本第一例ノ如キハ第十病日ニ於テ實ニ白血球ノ殆ンド全部ヲ占ムルト云フモ過言ニ非ザル可シ。

猩紅熱ニ於テハ「エオジン」嗜好細胞ハ終始增多ヲ以テ一貫スルモノナリ。

杉山ニ劇性猩紅熱血液像所見補遺

第六表 十五歳ノ少女

病日	赤血球			白血球														
	總數	血色素量 (ザイリ)	總數	淋巴球			中性核			嗜好			好「エオジン」嗜	鹽基性嗜好	「ミエロブラステン」	大單核及移行型	刺戟型	體溫
				「アツール」顆粒アル者	「リンホチ」	「アツール」	桿狀核	桿狀核	「メタミエロチ」	「ミエロチ」	「デレ」氏封入體持者	「デレ」氏封入體持者						
三日	四四〇萬	七三%	一、五〇〇〇	六・〇	二・〇	四〇・〇	二八・〇	一一・〇	二・〇	五・〇	一九・〇	三・〇	〇	一・〇	七・〇	一・〇	四〇・五	
五日	四八〇萬	七五%	三、三〇〇〇	四・五	一・〇	三〇・〇	三八・五	一〇・〇	五・〇	九・〇	二〇・〇	三・五	〇	三・〇	三・五	二・〇	三九・五	
九日	四六〇萬	八〇%	三、八〇〇〇	三・〇	〇	五〇・五	二〇・〇	八・〇	六・〇	一五・〇	一三・〇	一・〇	〇	二・五	二・〇	二・〇	三八・〇	
十四日(死亡)	四五五萬	七五%	六、四〇〇〇	〇	〇	四八・〇	三〇・〇	九・五	五・五	二〇・〇	八・〇	〇	〇	一・五	一・〇	二・五	三九・五	

次ニ劇症ノ場合本細胞ノ核及ビ原形質ニツキ見ルニ病日ノ進ムニ從ヒ桿狀核ハ増大シ又「メタミエロチ」等出現シテ非常ナル核ノ左方移動ヲ示スヲ見ル。其他原形質中ニ多數ノ「デレ」氏封入體及ビ中毒性空胞ヲ見ル。是等ハ原形質中ニ於ケル退行變性ノ増大ヲ明示スルモノナラン。

(二) 淋巴球

輕症ナル場合ハ淋巴球ハ白血球増大ト逆ニ一時減少スレド其後増數シテ傳染病後期ニ於ケル淋巴球增多症ヲ示ス。然ルニ余ノ得タル二例ニ於テハ初メヨリ高上スル事無ク最後ハ極メテ少ナキ「プロセント」ニ達ス。即チ全經過ヲ通ジテ減少ノ一途アルノミニシテ增多ヲ認メズ。又本細胞中「アツール」顆粒ヲ含メルモノ正狀ナルモノニ比シ極メテ減少セルヲ看取シ得ル(第五表及第六表參照)。

(三) 「エオジン」嗜好細胞

即チ第三表ニ見ルガ如ク四%、前後カラ多クハ一〇%前後ニ及ブ、然ルニ劇性症例ニ於テハ第一例(第五表參照)ニ見ル如ク第二病日ニ於テ三%ヲ見其後増大スル事ナク第八病日以後ハ全ク之ヲ發見スルヲ得ズ。又第二例(第六表參照)ニ於テモ同様之ノ增多ヲ見ズ。猩紅熱ノ豫後ヲ「エオジン」嗜好細胞ノ増減ニヨリトスルハ全ク理ノ當然ト思ハル。

(四) 大單核、鹽基性嗜好細胞其他

余ノ例ニ於テハ鹽基性嗜好細胞ハ第一例、第二例共ニ終始發見スル事ヲ得ズ。又大單核及ビ移行型ハ始メ六%前後ニ増加後日々ニ減少スルヲ見タリ。

此ノ他病的白血球トシテ多數ノ「ミエロプラステン」「ミエロチイテン」「メタミエロチイテン」及ビ少數ノ刺戟型等ヲ認メ得タリ。

(五) 赤血球

第五、第六表ニ於テ見ル如ク赤血球ハ總數及ビ血色素量等ニ於テ著明ノ變化ヲ認メズ。多少ノ「ポイキロチイトーゼ」「アニソチイトーゼ」ヲ認ムルノミ。

第三章 考察及ビ結論

以上余ノ得タル二例ヨリ考察スルニ惡性ノ劇性猩紅熱ニ於テハ高熱ノ繼續、強キ發疹及ビ「アンギーナ」竝ビニ咽頭痛ヲ認メ患者ハ興奮不安ノ狀ヲ呈シ早期ヨリ譫語ヲ發シ意識不明ニ陥リ十日乃至二週間前後ニシテ死亡セリ。又二例共ニ極メテ厚キ落屑ヲ認メ得タリ。

次ニ上述ノ血液像ニツキ考察スルニ

(イ) 白血球增多症極メテ大ナル事。

(ロ) 中性嗜好細胞ノ「プロセント」大ナル事、而シテ此ノ二現象ハ病日ト共ニ増大ス。

- (ニ)核ノ左方移動大ナル事。
 - (三)核及ビ原形質ノ退行變性大ナル事。
 - (ホ)病的白血球ノ出現多キ事。
 - (ヘ)「エオジン」嗜好細胞ノ減少又ハ全ク缺如スル事。
 - (ト)淋巴球減少
- 大略以上ノ如キ特徴ヲ認メ得タリ。

稿ヲ終ルニ臨ミ荏原病院長長岐博士、同副院長三方博士ノ御懇篤ナル御指導並ビニ御校閲ニ感謝ス。

主要文献

- 1) Victor Schilling, Das Blutbild und seine klinische Verwertung, 1929.
- 2) 小宮悦造, 古庄乙彦, 臨床血液圖説, 第二版.
- 3) 佐藤清, 實驗血液病學, 第二版.
- 4) 吉田禮藏, 日本傳染病學會雜誌, 第七卷.
- 5) 小島忠兵衛, 第三十四回, 日本小兒科學會.
- 6) 佐々木龍二, 第三十四回, 日本小兒科學會.